

おはま井戸 ～「氷川台」地名発祥の地～



有楽町線「氷川台」駅から南東に石神井井川を越えて200mほど歩くと、「おはま井戸」と呼ばれる一画があります。公園というには狭いし、神社の祠らしきものもありませんが、よく見ると、石碑や木の標識などが建っていて、コンクリート製の井戸の枠のようなものもあります。何やら由緒ありそうですが、ほとんどの人に知られることなくひっそりとしたたたずまいです。しかし、こここそが、地下鉄「氷川台」の名前の由来であり、旧下練馬村の鎮守様である「氷川神社」発祥の地なので、驚きです。

「おはま」とは人の名前ではありません。広辞苑によれば、「浜」とは「水際の平地」を指します。更に、「井戸」とは「地下水をくみ取るようにしたもの」ですから、つまり、ここにはその昔、「泉からこんこんと水が湧きいで、それが広く池のように広がり、そして石神井川に連なっていた様」が思い浮かべられることとなります。まさに豊かな自然の宝庫が連想されるのではないのでしょうか。きっと、鶴や鷺が舞っていたに違いありません。

氷川神社では、3年に1度、春祭りの日に、ご神体が「おはま井戸」へお里帰りをします。この春祭りで、雌雄2羽の鶴の舞が行われます。紋付羽織袴に竹で作った先のとがった冠をかぶった2羽の鶴が太鼓の音とともに首を大きく回し、次第に小さく振って舞うという、実に素朴なものです。今回は、平成21年4月です。



由来については、そこに立つ記念碑に次のように書かれています。

古老口碑に御花園天皇の長祿元年に渋川義鏡が足利成氏との戦に向かう途中 此処石神井川の急流に出会ふ淀む処に泉 渾々として湧出る水際の井戸即ち御浜井戸と称す 暫く兵士を休めてその傍に祠を建て須佐之男尊を祀り九月五日武運長久を祈る この流水を水田に用い一帶を

良田となす 近郷の農家の崇敬の的となり親しまれた 後 海老名左近住するに及び観世音を安置せる観音山 即ち今の地に遷さる 靈験あらたか 五十一宇の総鎮守となる 現今祈年祭に合せて毎年四月九日 祭神の御里帰りと称し 神社より此処え神輿渡御が行われる 行列は神幸旗を先頭に五色の吹流し 太鼓の響にのって氏子の人等の道中歌 此処に神輿を奉安し獅子の舞で祓い清め 子孫繁栄五穀豊穰を祈る雌雄二羽の鶴の舞が行われ その夜神社で田遊びの行事が行われる由緒ある処です 昭和四十七年四月吉日

公式には、これが正しいのでしょうか。しかし一方、練馬区史には、

「ある年、谷原村に疫病が流行してやまないのを、石神井川にその地の氷川神社のご神体を流し、それがここで拾われて、今に到った」

との記述もあります。どちらにもロマンがあり、遠い歴史を感じることができます。下手な推理小説よりもずっと面白いですね。